

目的 ヒトは自然環境の変化に対応して、人体を常に生理的に快適な状態に保つよう努力して生きている。快適とする着衣量は、同一環境温熱条件下で体格や年齢がほぼ同一であつても相当の個人差がみられる。先報では着衣量の個人差と皮膚温との関連につき実験による見解を報告したが、引き続きこれらの問題につき関連の著明な低温時における実験を行い、若干の成績を得たので報告する。

方法 被検者は健康な成人女子(年齢20~22才の大学生)とし、D.B.T. $12 \pm 1^{\circ}\text{C}$, R.H. $50 \pm 10\%$, A.V. $15 \pm 1\% \text{sec}$ の人工気候室内で、それぞれ上衣、下衣共同一形態の被服着用時における額、胸、腹、背、腰、手背、下腿、足背の皮膚温を測定、60分間の時間的变化をみた。又、同時に脈拍、呼吸数、口内温、寒暑感覚、皮脂厚等の測定を行った。なお同一被検者の年間季節別着衣調査により、単位体表面積 1cm^2 当りの衣服総重量と気温との関係を考察し、各人の回帰係数よりグループ分け(①厚着、②薄着、③普通)により皮膚温、快適感および皮脂厚との関連をみた。

結果 低温時における皮膚温は、薄着 < 普通 < 厚着の順に高くなり、同一形態被服着用による寒冷感覚結果および着衣調査による各人の年間衣服総重量も同順位で大となる。皮脂厚は、腹部、背部、上腕部共、何れにおいても薄着 > 普通 > 厚着の順に大となり、皮脂厚大であるほど体温保持に役立ち、皮膚温は低くなる。寒暑による衣服の調節は、必ずしも皮膚温の高低によつて行われているとはいふ難く、皮脂厚の影響が大であると示される。